北海道医報

ISSN 0913-0217　2026.10.1 第1297号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価1部275円(税込)

季節風

声の重さ

情報広報部　副部長　寺本（てらもと）　瑞絵（みずえ）

先日、気の置けない後輩との酒席で、こう言われた。「先生はまだ20代のつもりかもしれませんが、もう50を超えています。先生の言葉は、強く響くことがありますよ」。思いがけない一言に、ハッとさせられた。気持ちのどこかでは今も若い頃のままで、同じ仲間として率直に話しているつもりだった。年齢と経験、立場は、自分で思っていた以上に声の重量を変化させていたらしい。意見のつもりが、相手には指示として響く。確認の問いが詰問となり、次に質問する勇気まで奪うことがある。正しい内容であっても、相手の思考を止めてしまえば、よい診療にも教育にもつながらない。また、こうした経験は、決して自分一人に限ったものではないだろう。

もっとも、強い言動をとる人の多くは、悪意のある人物では決してない。「患者さんのために」「ミスを防ぐため」「後輩を育てるため」「研究成果を上げなければ」という責任感や使命感を抱いた、真面目で有能な人であることが多い。むしろ、組織を本気で良くしたいと考える人ほど、自分の行動の正しさを疑わず、周囲もその正当性を追認してしまうために、問題が深刻化するまで誰も止められない。かつて自分を成長させた厳しさを、同じように次の世代に求めてしまうこともあるだろう。しかし、時代も、社会も、働き方も、人と人との関わり方も変化している。

長時間労働や人手不足、過剰な成果要求といった構造的負荷の中では、強い言動が「必要な指導」として容認されやすい。優れた実績を持つ人であれば、なおさら「余人をもって代えがたい」と見なされ、実績への評価がその言動まで正当化してしまう。周囲が「みんなも我慢しているのだから」と異論をのみ込む一方で、本人はその沈黙を信頼の証と受け取る。こうして、問い直されない厳しさが「組織の当たり前」となり、次の世代へと受け継がれていく。

また、医療現場の緊張は院内だけで生まれるわけではない。失敗を許さない社会の目、限られた医療資源の中で効率化を求める政策、迅速な対応と十分な説明の両立を求める声など、外部からの要求も現場に流れ込む。「間違えず、無駄なく、速やかに」という社会の要請は、現場では上司から部下への厳しい指導や、職種間の張りつめたやり取りとなって表れることがある。

現場が何とか回っているように見えるのも、誰かの我慢に支えられているだけかもしれない。声を上げにくい人が無理を重ね、断れない人が仕事を引き受け、評価を気にする人が異論をのみ込む。その積み重ねを、私たちは「現場が回っている」と捉えてきたのではないか。組織にとって合理的に見える仕組みが、特定の人の我慢を前提としていないかを問い直す必要がある。

社会思想家の今村仁司は、次のように書いている。「かりにわれわれ一人一人が、まことに純度の高い道徳意識をもち、良心堅固な人間であると仮定したとしても（事実たいていの人々は「よき人間である」）、その「よき人間」が、社会生活を営むなかで、各人の意図や良心のありようを超えて、あるいは各人の「よき」意図や道徳心にもかかわらず、他人を排除したり差別したりするのである。」（今村仁司『近代性の構造「企て」から「試み」へ』講談社選書メチエ）

この言葉は、問題を個人の善意の有無だけでは説明できないことを示している。善意で働く人であっても、置かれた関係や制度の中で、誰かを追い詰める側に回り得る。個人を責めるだけでは、同じことが繰り返されかねない。だからこそ、その言動を生み、容認する環境にも目を向けなければならない。業務量は適正か。役割分担や評価の基準は明確か。実績と人への接し方を、切り分けて評価できているか。人材や時間の不足を、誰かの献身で埋めてはいないか。声を上げても不利益を受けないことを示せているか。こうした問いに向き合い、具体的な改善を重ねることで、互いを尊重する風土は育っていくのだと思う。

年齢と立場を重ねるということは、自分の声が以前より強く遠くまで届くと知り、その届き方に責任を持つことなのだろう。「先生、その言い方は少し強いです」。そう言ってもらえる関係を大切にし、その声が聞こえたときには、きちんと立ち止まれる人でありたい。同時に、組織はその一言を安心して伝えられる場になっているか、社会は医療現場に立ち止まる余裕を残しているかも、問い続けたい。